

# サージェンツ事件：パレスチナ英国委任統治下の悲劇的な出来事

パレスチナ英国委任統治の最終的な激動の年月において、将来のイスラエル首相メナヘム・ベギンの指導下にあるユダヤ地下組織イルグンが英国当局に対して暴力的なキャンペーンを展開した。彼らの作戦には、アラブ市場への爆破、英国の軍事・行政施設への攻撃、そして注目度の高い誘拐が含まれていた。民族主義的な目的に駆り立てられていたとはいえ、これらの行動の多く——特に民間人を標的にしたものや恐怖を植え付けることを意図したもの——は、今日広く受け入れられている現代的な定義の下では、間違いなくテロ行為として認識されるだろう。

英国当局は、逮捕、軍事裁判、そして捕虜となったイルグン戦闘員の処刑を含む厳しい対抗措置で応じた。この時期で最も重大な出来事の一つがサージェンツ事件であり、それは1947年5月のアクレ刑務所脱獄時に捕らえられた3人のイルグン構成員に対する死刑判決から始まった。英国軍に対する暴力行為——爆発物の使用と武装抵抗を含む——で有罪とされたアブシャロム・ハビブ、メイア・ナカル、ヤコブ・ワイスは絞首刑を宣告された。

## 誘拐

英国の諜報機関と軍当局から発せられた増大する脅威と明確な警告にもかかわらず、イルグン工作員による誘拐のリスクは現場の人員によってしばしば過小評価されたり無視されたりした。1947年夏に英国陸軍情報部隊の第252野戦保安部に勤務していた、わずか20歳のクリフォード・マーティン軍曹とマーヴィン・ペイス軍曹の場合もそうだった。1947年7月11日、両軍曹は非番で、非武装で私服姿だった。彼らはユダヤ人人口と地下活動で知られる沿岸都市ネタニヤで社交することを選んだ。彼らはネタニヤのカフェを訪れ、英国軍リゾートキャンプの現地事務員であるユダヤ人難民アーロン・ワインバーグと会話を交わした。

軍曹たちは知らなかったが、ワインバーグはハガナーとイルグンの両方に秘密裏に所属する二重スパイとして活動していた。英国将校の信頼を得た後、ワインバーグは軍曹たちとの出会いをイルグン指導部に報告した。組織は迅速にチームを動員して情報に基づいて行動した。作戦を率いたのはベンヤミン・カプランで、以前に劇的なアクレ刑務所脱獄で解放されたベテランイルグン工作員だった——まさに3人のイルグン構成員が今処刑を待っているその襲撃である。

マーティンとペイスがカフェを出ると、イルグン部隊に待ち伏せされ誘拐された。彼らはネタニヤの隠された場所——即席の拘留施設に改造されたダイヤモンド研磨工場——に移送された。そこで彼らは狭く気密の地下セルに閉じ込められ、限られたボンベ入り酸素、食料、水で18日間生かされた。身体的状況は過酷だったが、心理戦の要素は同等に強力だった：誘拐はイルグン捕虜の予定された処刑を再考させるための意図的な戦術だった。この意味で、誘拐は報復の脅威でもあり、戦略的な圧力の行為でもあった。

## 人質交渉

イルグンの動機は、軍曹たちを交渉材料として使い、1947年5月のアクレ刑務所脱獄時に捕らえられた3人のイルグン戦士——アブシャロム・ハビブ、メイア・ナカル、ヤコブ・ワイス——の処刑を止めることだった。3人は違法な武器所持と危害の意図で有罪となり、英国当局によって7月8日に死刑が確定した。イルグンは公的な脅威を発した：処刑が進めば、マーティンとペイスは報復として絞首刑にされる。

誘拐のニュースが広がると、軍曹たちの解放を確保するための努力が激化した。7月17日、英国下院議員リチャード・クロスマンとモーリス・エデルマンが公に自由を訴え、他の著名人や一般市民が加わった。マーヴィン・ペイスの父親はメナヘム・ベギンに心を揺さぶる手紙を書き、息子の命を懇願した。手紙はイルグン関係の郵便職員を通じてベギンに届いたが、ベギンはイルグンの秘密ラジオ局**コル・ツィオン・ハロヘメット**での放送で冷たく応じた：「石油と血に渴くあなたの政府に訴えなければなりません」。

一方、英国の諜報・保安機関は人質の位置特定と救出のための大規模な作戦を開始した。情報に基づきネタニヤのダイヤモンド研磨工場を搜索したが、任務は失敗した。軍曹たちは隠された気密の地下セルに拘束されていた——この詳細は嗅覚犬や標準的な搜索技術を無効化した。

公的訴えの増大する圧力、潜在的な報復の道徳的重み、そして状況の明白な緊急性に直面して、英国当局は立場を維持した。テロリストとの交渉を拒否するという長年の政策に忠実に、予定通りの処刑を実行することを選んだ。7月27日、パレスチナ放送会社はハビブ、ワイス、ナカルが7月29日に処刑されると発表した。1947年7月29日、ハビブ、ナカル、ワイスはアクレ刑務所で絞首刑にされた。

## 殺害とその恐ろしい後日談

処刑に激怒したメナヘム・ベギンはマーティンとペイスの即時殺害を命じた。7月29日夕刻、軍曹たちは意図的に残酷で象徴的な行為で処刑された。イルグン工作員はピアノ線を使って絞首を実行した。この方法はゆっくりとした苦痛の死を保証した——英国の絞首台の急速な落下とは不気味な対比だった。この方法は英国の処刑スタイルへの直接的な対抗として選ばれた——メッセージを送るための計算された残虐行為だった。

殺害後、イルグンは遺体をネタニヤ近郊の孤立したユーカリ林に移した。そこで遺体は木に吊るされ、顔は包帯で覆われ、シャツは部分的に剥ぎ取られ、脆弱性と屈辱を強調するように配置された。衝撃を増幅し迅速な回収を防ぐため、イルグンはマーティン軍曹の遺体下に接触地雷を仕掛けた。この追加は発見現場を致命的な罠に変えた。

このプロパガンダ主導の作戦の最終行為はメディア操作だった。イルグンは匿名でテルアビブの新聞社に連絡し、遺体の位置を提供した。7月31日、英国兵とジャーナリストが遺体を発見した。光景は恐ろしかった：軍曹たちの黒ずみ血まみれの遺体が木から吊るされ、イルグンの声明が貼り付けられ、「反ユダヤ犯罪」で男性を非難していた。D.H.ガラッティ大尉は地域を点検後、棒に固定したナイフでマーティンの遺体を切り始めた。遺体が落ちると地雷が爆発し、

マーティンの遺体を粉碎し、ペイスの遺体を切断し、ガラッティの顔と肩を負傷させた。報道が捉えた恐ろしい画像は世界を震撼させた。

## 世界的な非難と暴力的な報復

イルグンによるクリフォード・マーティンとマーヴィン・ペイス軍曹の処刑は、英国とその外に嫌悪の波を送った。殺害の残虐な性質、それらの象徴的なタイミング、そしてイルグンの悔い改めない姿勢は、政治、メディア、公共の領域で広範な非難を引き起こした。

英国報道では反応は迅速で痛烈だった。タイムズ紙は強力な社説で国民の気分を捉えた：

「この国だけでなく世界中で、2人の英国兵の冷血な殺害がユダヤの原因に与える損害を推定するのは難しい。」

同様に、マンチェスター・ガーディアン紙は殺害を現代政治的暴力の歴史で最も卑劣な行為の一つと非難し、ナチスの残虐行為との比較を引いた。

英国では反応は修辞を超えた。1947年8月の銀行休暇週末に複数の都市で反ユダヤ暴動が勃発した。リバプール、ロンドン、マンチェスター、グラスゴーでユダヤ人所有の事業、住宅、シナゴグへの攻撃が発生した。窓が割られ、建物が略奪され、ユダヤ人コミュニティが嫌がらせを受けた——数十年で英国で最悪の反ユダヤ暴力だった。壁には「ユダヤ人の殺人者」や「ヒトラーは正しかった」などのぞっとするスローガンが現れた。

一方、パレスチナでの反応は全く異なった。イルグンは悔恨を表明するどころか、殺害を誇り、戦時抵抗の正当な行為として描いた。彼らの地下報道では次のような大胆な声明を発表した：

「私たちは一方的な戦争法を認めない。」

この声明はイルグンのより広いイデオロギー的立場を反映していた：英国は法を施行したり交戦条件を指示したりする道徳的権威を持たない。彼らにとって軍曹の絞首は犯罪ではなく、抑止と反抗の計算された行為だった——英国の抑圧と不正に対する彼らの認識への反応だった。この枠組みでは、道徳的正当性は国際法や普遍的原則によって定義されるのではなく、彼らの国家闘争の認識された正しさによって定義された。このような推論——暴力的な報復を非合法的な占領勢力に対する抵抗行為として描く——は、ハマスなどの後続の過激派運動の修辞に響き、暴力を見かけの外国支配と体系的不正に対する防衛的行動として同様に正当化する。

しかし、イルグンの行動が一部のシオニスト圏で妥協のない国家決意の表現として称賛された一方で、より広いユダヤ人コミュニティ内で深い道徳的不安を引き起こし、国外で憤慨を呼んだ。特に英国と米国での国際世論はシオニストの原因に対して急激に反転し、解放ではなくテロリズムと結びつけた。サージェンツ事件はこうして、国家主義的・反乱運動を今も悩ませる危険なパラドックスを露呈した：一方で英雄的な抵抗行為と見なされる同じ行動が、他方では擁護不能な残虐行為として見られることがある。この声明はイルグンのより広いイデオロギー的立場を反映していた：英国は法を施行したり交戦条件を指示したりする道徳的権威を持たな

い。彼らにとって軍曹の絞首は犯罪ではなく、抑止と反抗の計算された行為だった——英国の抑圧と不正に対する彼らの認識への反応だった。

## 遺産と歴史的意義

サージェンツ事件はパレスチナにおける英国支配の崩壊における決定的な転換点となった。クリフォード・マーティンとマーヴィン・ペイス軍曹の残虐な殺害から数ヶ月後、英国政府は国連に委任統治の終了意図を正式に通知した。数十年にわたる行政負担、増大する暴力、そして上昇する政治的コストが継続的な支配を維持不可能にした。イルグンのキャンペーン——英国兵の公開処刑で頂点に達した——は英国の士気を深く傷つけただけでなく、執拗な反乱と国際的監視の前での帝国権力の限界を示した。

1947年11月、国連はパレスチナを別個のユダヤ人とアラブ国家に分割し、エルサレムを国際管理下に置く分割計画に投票した。提案は、当時ユダヤ人が人口の約3分の1しか占めず、領土のわずか7%を法的に所有していたにもかかわらず、土地の約55%をユダヤ国家に割り当てた。この決定は多くのユダヤ人に歓喜をもたらし、アラブ諸国とパレスチナ・アラブ指導部から激しい拒絶を受け、内戦、そして最終的には全面戦争への舞台を整えた。

現役の英国君主はイスラエル国家を訪れたことがない。近年王族が訪問しているものの、70年間統治したエリザベス2世女王は決してその国に足を踏み入れなかった——この欠落はしばしば、英国支配の痛ましい最終年に根ざした未解決の外交的緊張の微妙だが持続的な表現として解釈される。

サージェンツ事件はこうして、衝撃的な暴力の瞬間であるだけでなく、歴史的な転換点でもある——帝国が崩壊し、外交が躓き、中東史の新たな不安定な章が始まった場所である。

## 参考文献

- Bell, J. Bowyer. **Terror Out of Zion: The Fight for Israeli Independence**. New Brunswick, NJ: Transaction Publishers, 1996.
- Horne, Edward. **A Job Well Done: A History of the Palestine Police Force, 1920–1948**. Palindia Press, 1982.
- Morris, Benny. **Righteous Victims: A History of the Zionist-Arab Conflict, 1881–1999**. New York: Vintage Books, 2001.
- Segev, Tom. **One Palestine, Complete: Jews and Arabs Under the British Mandate**. New York: Henry Holt and Company, 2000.
- The Times (London). “The Hanging of the Sergeants.” 1947年7月31日。
- The Manchester Guardian. “Political Terror and the British Response.” 1947年8月1日。
- 国連総会。決議181 (II): パレスチナの将来政府。1947年11月29日。
- BBC News. “British Jews Targeted in 1947 Riots after Palestine Killings.” 2017年7月31日。
- イスラエル外務省。 **The Story of the Jewish Undergrounds**。
- Gilbert, Martin. **Israel: A History**. New York: Harper Perennial, 2008.